

『一枚の雑巾』

中関令美

2986字

綺良羅は東京都の小学一年生。学校は楽しいけれど掃除の時間だけは嫌だった。冷たい水に雑巾を浸すとやってくるゾクとする寒気。しかし、先生の一言で綺良羅は変わる。そしてアメリカに引っ越すことになった綺良羅は日本のキレイをアメリカに、そして世界に広める夢をもつのである。

「筆箱、上履き、ノート3冊、三角定規に体操着ね。」お母さんは小学校から送られてきた持ち物リストを読みながら、私に明日の持ち物を読んだ。「あ、あとは雑巾。掃除の時間に使うのよ」そう言って私に一枚の雑巾を手渡した。「なくさないようにひらがなで「きらら」って右端に糸で縫っておいたから。綺良羅の好きなピンク色の糸よ」「これで毎日お掃除するの？」「そうよ、毎日。終礼が終わったらお友達と協力して、教室のお掃除をするんだよ。」「へー。そうなんだ」私は正直「めんどくさっ！」と思いながら、お母さんが縫ってくれた雑巾を赤いピカピカのランドセルの中に突っ込んだ。この一枚の雑巾が私にとってどんなに大切なものになるのか、思いもせずに。

入学式の日が来た。満開な桜並木の下を、右手はお母さんと、左手はお父さんと繋いでもらい、私はウキウキしながら小学校に向かった。教室に一步入るとそこはもうピカピカの世界。何もかもがピカピカに輝いて見えた。キレイに整頓された本棚に、ゴミ一つない床。机と椅子はキレイに整列されていて、黒板にはキレイな文字で「ごにゆうがくおめでとございます」と書かれていた。黒板の右はじを見てみると、「きょうのじかんわり」と書いてあった。そこで私は気づいた。一番最後に「そうじ」と書いてあることを。「これが噂の掃除か〜」そう私は思いながら自分の席についた。

そして、ついにやってきた掃除の時間。「みなさーん。これから掃除の時間を始めます。みんな雑巾は持ってきたかな？」先生は私たちに尋ねた。「はいー！」私も人一倍大きな声で自信満々にお母さんの縫ってくれた雑巾をランドセルから出した。「はい、では掃除を始めましょう！」こうして初めての掃除の時間は始まった。

「よいしょ、よいしょ」私とお隣の席のかずきくんは冷たい水の入ったバケツを教室に運んだ。「運んできてくれてありがとう。じゃあ、自分の雑巾を持ってきて、お水にたっぷり浸

けてからぎゅっと、絞ってね！」先生は私たちにこう指示した。「ピシャ！」みんながバケツの周りに群がって、一気に雑巾をバケツに入れたから、水しぶきが上がった。「冷たっ！」私のお気に入りのピンクの水玉のスカートが濡れてしまった。「きっと乾くだろう」そう思ってあまり気にせずにつつりと水に浸かった雑巾をとった。すると、隣にいたかずきくんの雑巾から水が滝のように落ちてきて、私のスカートと上履きはビショビショに。「ぎゃー！」冷たくて思わず叫んでしまった。「先生！かずきくんが私の服と上履きを濡らしましたー！」こう先生に告げ口し、「もう、掃除なんか嫌だ！」と言い捨てて、雑巾を放り投げた。この日以来、掃除の時間が大嫌いになった。雑巾を水に浸す度にゾツとする寒気。掃除なんかしたくなかった。

ある日、体操着袋を置いておく棚の掃除をすることになった。「なんでかずきくんのところは拭かないの？」かずきくんのところを拭かずに掃除を終わらせようとした私に先生は尋ねた。「だって、かずきくんはこの前私に水をいっぱいかけて、すごく冷たかったもん。だからかずきくんのところなんか掃除したくない！」私は口をとんがらがせてこう言った。先生は私の両手を握って言った。「綺良羅さん、あのね、掃除というのは自分のもの、自分が使ったところだけがキレイになったらいい、という訳じゃないの。かずきくんを見てごらん。綺良羅さんの机の上もキレイに拭いてくれてるでしょ。教室はみんなのもの。みんなでキレイにするところよ。自分だけじゃなくて、お友達のことも考えて、みんながキレイな教室でお勉強したり、給食を食べたりできる場所を作ろうよ！」この言葉で私は変わった。

次の日から私は雑巾を手に取り、教室がピカピカになるまで友達と隅々まで掃除をした。友達がキレイにしてくれた場所は「キレイにしてくれてありがとう！」と感謝し、友達も私に感謝してくれた。こうして、大嫌いだった掃除の時間が大好きな時間変わった。みんなで一緒にキレイな空間で勉強し、笑い、たくさんの思い出を作った。しかし、別れのときは突然にやってきたのである。数ヶ月後、木々が紅葉し始めるころ、私はお父さんの仕事の関係

でアメリカに家族で引っ越すことになった。「アメリカでもお友達と協力して楽しく掃除してね！」そう先生は言い、私を抱きしめてくれて、私は雑巾をリュックサックにキレイにたたんで入れて、アメリカへ旅立った。

しかし、アメリカには掃除の時間なんか存在しなかった。授業が終わると“See you tomorrow!”と言い捨て、自分の食べたお菓子のゴミや消しゴムのカスを机から床に落とした。机の上にはこぼされたジュースもあった。“No clean-up?”たどたどしい英語で私はクラスメートに訪ねた。“Clean-up? Why should I? It’s the custodian’s job! Not mine!”掃除は清掃員の仕事だから、自分では掃除なんかしない、という答えが帰ってきたのだ。そう、アメリカの学校には掃除の時間がない。掃除専用の清掃員がいるのだ。私の頭の中は疑問だらけだった。「教室はみんなのもの。みんなでキレイにするところよ。自分だけじゃなくて、お友達のことも考えて、みんながキレイな教室でお勉強したり、給食を食べたりできる場所を作ろうよ！」先生のこの言葉を思い出した。教室はみんなでキレイにするべきだよ。汚い教室のままで帰るのはおかしいよ。そうクラスメートに私は伝えたかった。しかし、英語が全然話せない私にはそれができなかった。だったら行動に移して伝えよう。放課後、誰もいなくなった教室で、私はリュックサックからお母さんの作ってくれた雑巾を取り出した。水に浸して絞った雑巾で机にこぼされたジュースを拭き取った。床の雑巾がけをしようとした瞬間、担任の先生が私の肩をポンポンと叩いた。驚いた私は謝らなきゃっと思い、“I’m sorry!”と慌てて謝った！でも、先生はニコッと笑った。そして、“Thank you.”と言ってくれて、明日からはみんなで掃除をしましょう、と言ってくれたのだ。

次の日、雑巾を取り出したら、クラスメートたちが私の周りに群がって、“What is this?”と興味津々そうに雑巾を指差した。“It’s Zokin!”私は誇らしげに言って、水に浸して絞った雑巾で友達の机を拭いてあげた。“Oh! Thank you!”と嬉しそうに感謝してくれた。そ

の日以来、クラスメートたちはいらぬタオルを“Zokin”にして私と一緒に教室を掃除した。届かないところやどうしても取れない汚れは清掃スタッフにキレイにしてもらうことにした。やっぱり自分たちの教室を自分たちでキレイにするのは楽しい。

一枚の雑巾が私に大切なことを教えてくれた。自分のことだけではなく、他の人たちのことも考え、みんながキレイな場所で過ごせるようにすること。それが日本の「キレイ」の意味だ。一枚の雑巾が“Zokin”としてクラスメートの間で広まったように、私も将来、日本の「キレイ」を世界中に広めたい。そして、自分以上に他の人たちのことも考え、みんなが快適な生活ができるように自分から行動できる、心のキレイな人にもなりたいな。